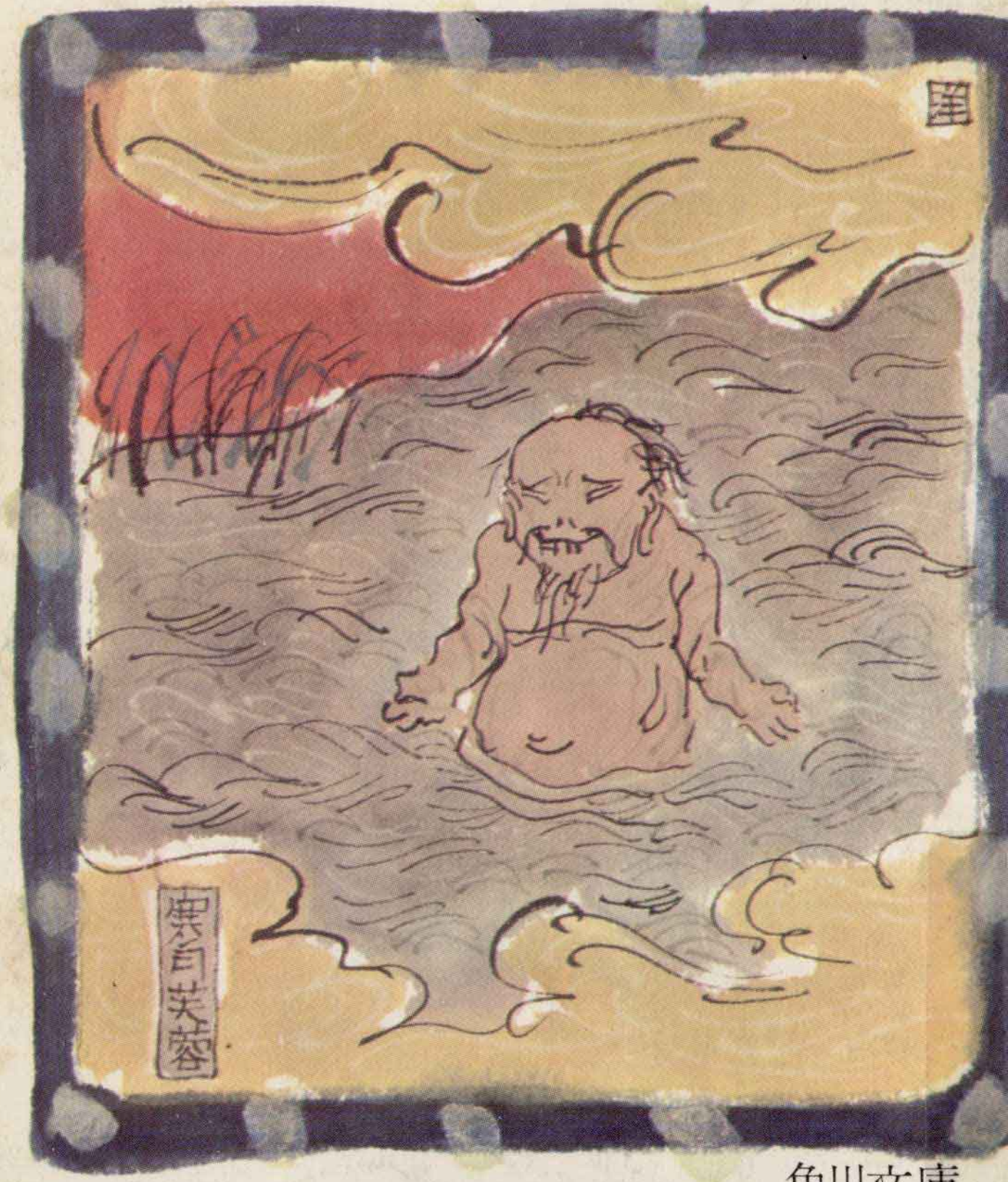
完訳

# 聊斎志異

第四巻

蒲松齢　柴田天馬訳



角川文庫

昭和四十五年二月二十日　改版初版発行

定価は、帯・カバーに明記してあります

角川文庫

聊斎志異　第四巻
全四冊

訳者　柴田天馬

発行者　角川源義

印刷者　中内佐光
東京都文京区大塚六ノ二ノ五

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　暁印刷・本間製本

完　訳

# 聊　斎　志　異

第四巻

蒲　松　齢
柴田天馬訳

角川文庫
995

# 目次

丐仙 一三
人妖 二三
竜飛相公 三〇
梓潼令 三八
単父宰 三九
阿霞 四一
林四娘 四九
江中 五七
蕭七 五九
獅子 六九
長治女子 七〇
馮木匠 七五
阿宝 七六
郭安 八〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

孫必振　九〇
賭符　九一
王六郎　九四
犬燈　一〇三
新鄭獄　一〇六
顧生　一〇九
画皮　一一三
紫花和尚　一二一
楊大洪　一二四
祝翁　一二七
緑衣女　一二九
王貨郎　一三三
双燈　一三五
閻王　一三九
胡四相公　一四三
僧術　一五一
画壁　一五五

侯静山　一六〇
段氏　一六二
王者　一六七
黎氏　一七三
雷曹　一七七
鞠薬如　一八四
喬女　一八五
毛狐　一九一
席方平　一九八
黒獣　二一一
郭生　二一三
閻羅薨　二一七
荷花三娘子　二二一
果報　二二〇
果報二　二二二
酆都御史　二二三
九山王　二二六

司札吏　二四二
甄后　二四四
死僧　二五一
夢狼　二五三
寃獄　二六〇
牧豎　二六四
竹青　二六六
閻羅宴　二七三
王十　二七六
鬼作筵　二八一
馬介甫　二八五
役鬼　三〇二
汪可受　三〇三
募緣　三〇七
紅玉　三一三
元少先生　三三四
聶政　三三七

連城　三三九
鳥語　三四〇
偸桃　三四四
布客　三五〇
績女　三五三
阿繡　三六六
三仙　三七三
孫生　三七六
汪子秀　三八二
金永年　三八七
織成　三八八
駆怪　三九五
邵士梅　四〇〇
細柳　四〇二
醜狐　四一三
祿數　四一八
二商　四二〇

土偶　四二六
武孝廉　四三〇
潞令　四三六
魯公女　四三八
于江　四四八
柳氏子　四五〇
胡氏　四五四
李伯言　四五九
胡大姑　四六五
蹇償債　四七〇
房文淑　四七四
黑鬼　四八一
蘇仙　四八二
金和尚　四八六
牛飛　四九一
劉海石　四九三
小髻　四九八

珠児　五〇〇
佟客　五一〇
劉姓　五一三
薬僧　五一九
王大　五二二
李八缸　五三〇
彭海秋　五三四
邵臨淄　五四五
葉生　五四七
周三　五五三
薛慰娘　五五六
任秀　五六六
牛瘋　五七〇
金陵乙　五七五
安期島　五七八
僧孽　五八二
蓮香　五八五


此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

王蘭　六〇七
夜叉国　六一四
伏狐　六二四
寒月芙蓉　六二六
桓公　六三三
狂生　六三八
天宮　六四〇
罵鴨　六五〇
毛大福　六五一
小官人　六五五
白蓮教　六五六

細項目一覧　六五九

さしえ　井上洋介

完訳

# 聊斎志異　第四巻

# 丐仙

故家の子の高成玉は、金城の広里に住んでいたが、鍼と灸が善で、頼みに来るものがあれば貧富を選ばず、どんどん療治をするのだった。

あるとき、里中に一人の丐が来た。足に廃い瘡があって、道に寝ているあたりには、血うみが流れ、臭くて近よれなかったけれど、土地の人たちは、彼の死ぬのを恐れて、日に一度は食わせていた。

高は乞食を見て、あわれに思い、人をやって助けてこさせると、耳舎[一]に置いた。家人は、臭いのを、いやがり、遠くに立って鼻をおおっていたが、高は艾を出して、みずから乞食のために灸をすえ、毎日、疏食[二]を食わせていた。

幾日かすると、乞食は湯餅[三]をくれと言った。下男が怒って叱りつけるのを聞いた高は、すぐに言いつけて、湯餅をやった。するとまもなく乞食は、また酒と肉をくださいと言うので、下男は駆けて行って高に告げた、

「先生！　あの乞食ぐらい、おかしなやつはありません。道なかに寝そべってた時には、日に一ぱいの飯にさえ、ありつけなかったくせに、今じゃ三どの飯も、そまつなものを、いやがって、湯餅をやれば、また酒と肉をくれって言うんですから、こんな食いしんぼうは、もとどおり往来に棄てちまったほうが、よろしゅうございます」

高が、その瘡はと聞くと、下男は言った、
「へい。だんだん、かさぶたが取れて、もう歩けるようなんですのに、わざと苦しそうに、うなってるんでございます」
「わずかなことだから、酒と肉をくれて、達者になるまで待ってやりなさい。悪くは思わんだろうからな」
しかし下男は、承知したようなふりをして、とうとうやらなかった。そして、仲間と話しあい、みんなで、主人のおろかしさを笑ったのである。
あくる日、高は自分で乞食を見に行った。すると乞食は、ちんばをひきながら立ちあがって礼を言った、
「あなたのおかげで、助かりました。天地のような大恩です。ただ直りたてで、力がないもんですから、つい、いじのきたないことを考えましたのじゃ」
それを聞いて高は、前の言いつけが実行されていないのを知り、下男を呼びだして、ひどく笞(むち)った。そして、すぐ酒さかなを持って来て、乞食に食わせろと言いつけた。
下男は、それを根に持って、夜分になるのを待ち、火をつけて長屋を焼いた。そして、わざと、どなりたてた。
高が起きて見に行ったときには、家は、もう焼け落ちていたから、
「乞食は、だめだ！」
と嘆息しつつ、みんなを督励して火を消させたが、見ると、乞食が、火の中に、ぐっすり寝たまま、かみなりのようないびきをかいているので、呼び起こすと、わざと驚いたふりをして、

「や！　家は、どこへ行った？」

と言った。みんなは、はじめて、彼が、ふしぎな人であるのを知って、驚いたのである。

それから高は、いよいよ彼を大事にし、新しい着ものをきせて客間に寝させ、毎日、いっしょにいるのだった。姓名を聞くと陳九だと名のった。

幾日かいるうちに、彼の姿は、ますます光沢しくなってきた。彼は話が多風格なうえに善手談く、闘うと、高が負けた。で、毎日、彼について碁を学び、たいそう得奥秘になったのである。

そんなふうで半年ほどたったけれど、乞食は、さらに行こうと言わないし、高も、また、ちょっとでも彼がいないと、おもしろくなかったので、貴客の来たときでも、必ず彼とともに酒を飲んだり、または彼に骰を投げさせて酒令をさせるのだった。

陳が、いつも高に代わって采を呼ぶときには、雉でも盧でも、思いのままに出るので、高はたいそう奇に思った。

しじゅう高は、劇を使って見せろと頼むけれど、彼は知らないと言って、ことわるのがつねであった。と、ある日高に言った、

「わしは、別れを告げようと思っている。これまでにきみから受けた恵みは深いものだったな。今日は、少しばかり設をして、きみを呼びたいと思うんだが、人を連れてきては、いけないよ」

高は言った、

「ぼくらは友だちになって、ひどく、よろこんでいるんじゃないか。どうして、だしぬけに別れようなんて、言いだすんだ。それに杖頭空虚んきみから、不煩作東道主さ」

しかし陳は、しきりに高を呼ぼうとして言うのだった、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com